

マルコ6章1-6節 「不信仰に驚かれるイエス」

1A 弟子たちとのナザレ訪問 1

1B 崖落とし事件

2B 再訪問

2A 人々の驚き 2-3

1B 知恵と力の出所 2

2B 手に職と家族 3

3A 郷里で敬われない預言者 4

1B 近しい者だからこそその拒絶

2B 肉の誇り

4A 行われない業 5-6

1B 僅かな奇蹟 5

2B 近くの村々への宣教 6

本文

マルコによる福音書6章を開いてください。私たちの聖書の学びはマルコ5章まで来ました。今日は、少しいつもととは違います、一節ずつの学びを午前中も行います。午前中に初めの部分、1 節から 6 節までを取り上げ、午後は 7 節から始めたいと思います。ですので、1 節から 6 節を、まず読ませていただきます。「1 イエスはそこを去って郷里に行かれた。弟子たちもついて行った。2 安息日になって、イエスは会堂で教え始められた。それを聞いた多くの人々は驚いて言った。「この人は、こういうことをどこから得たのだろう。この人に与えられた知恵や、その手で行われるこのような力あるわざは、いったい何なのだろう。3 この人は大工ではないか。マリアの子で、ヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンの兄ではないか。その妹たちも、ここで私たちと一緒にいるではないか。」こうして彼らはイエスにつまずいた。4 イエスは彼らに言われた。「預言者が敬われないのは、自分の郷里、親族、家族の間だけです。」5 それで、何人かの病人に手を置いて癒やされたほかは、ここでは、何も力あるわざを行うことができなかった。6 イエスは彼らの不信仰に驚かれた。それからイエスは、近くの村々を巡って教えられた。」

イエス様が、久しぶりにご自分の故郷に戻られた時の話です。私たちの年末年始、実家に帰っておられる方が多いですが、ここは、直接、関わりのある内容になっています。キリスト者として、肉の家族や親族に会う時によく遭遇することではないでしょうか？ 家族伝道は、いろいろな伝道の中で、最も難しい伝道とも言われます。けれども、イエス様ご自身が故郷では敬われないというご経験をされました。

1A 弟子たちとのナザレ訪問 1

1B 崖落とし事件

実は、イエス様がナザレにある会堂で教えられたのは、これが初めてではありません。ガリラヤで宣教を始められた初めに、ナザレに戻られて安息日に教えられました。ユダヤ教ではシナゴグで、どこを朗読するのか決められていますが、その時はイザヤ書 61 章のところでした。メシアが、キリストが貧しい者たちに福音を語り、虐げられている人々に解放を告げるということ。そして、主の恵みの年を告げるために、と言ったところで止めて、「あなたがたが耳にしたとおり、今日、この聖書のことばが実現しました。(ルカ 4:21)」と宣言されたのです。つまり、イエスご自身がメシアとしてここに来られた、ということです。

初め、ナザレの人たちは驚きました。こんな恵みのことばを聞いたことがないと。しかし、すぐに、彼がメシアであるかのように語っているが、「ヨセフの子ではないか。(22 節)」と言って疑ったのです。ナザレは、とても小さな村、だれもがイエス様のことを幼い時から知っていました。それで、イエス様は、ご自分がカペナウムで働きを行い、「あなたの郷里のここでもしてくれ。」というでしょう、という事になると予告されました。それから、預言者は郷里では歓迎されないこと、そして、イスラエルの預言者たちがイスラエルでは奇跡を行わなかったのに、周囲の異邦人に対して行なわれたことを語られました。これが彼らを怒らせました。自分たちを拒んで、異邦人に救いを与えることを告げられたからです。それで崖から突き落とそうとしました。ところが、イエス様は彼らの只中を通り抜けて、去って行かれたのです。

2B 再訪問

このようなことがあって、しばらく経ってからナザレに戻られています。1 節をもう一度、読みましょう。「1 イエスはそこを去って郷里に行かれた。弟子たちもついて行った。」

イエス様は、初めにナザレに行かれた時は、ただ独りであったと思われます。ユダヤ教のラビの資格は与えられていたので、イザヤ書の巻物が手渡されたのですが、しかし、弟子たちはいなかったと思います。けれども、ガリラヤ湖畔で数多くの大きな業を行われ、弟子たちも同行しています。世の中的に見ても、人間臭い言い方をするならば、「ずいぶん出世した」ということになります。しかし、家族たち自身はかなり当惑していたと思います。マリアを始め、弟たちがカペナウムまでわざわざ来て、イエス様がどうも気が変になっているのでは？という噂を聞いて、引き取りにいったのです。そこでイエス様が言われたのは、「わたしの母、妹、弟はだれですか？わたしのことばを聞いて、守る人ではないですか。」と答えられていました。

この肉のつながりというのと、霊のつながりというのは、微妙な問題です。肉の両親を敬うことは、キリスト者と言えども、いやキリスト者だからこそ、神の命令として従っていくものです。パウロは、テモテ第一で、「I テモ 5:8 もしも親族、特に自分の家族を世話しない人がいるなら、その人は信

仰を否定しているのであって、不信者よりも劣っているのです。」と言いました。けれども、主につながる群れ、その霊の家族は、イエス様の言われていることを守っていくことが最も大切な集団であって、そこに他の誰も入ることはできないということです。夫婦関係に親が入れば、その関係に亀裂が走るでしょう。同じように、イエス様と自分との間に親の意向が入るなら、そこに亀裂が走ります。イエス様を何よりも第一としなければいけないということを、この話は教えています。

2A 人々の驚き 2-3

1B 知恵と力の出所 2

2 安息日になって、イエスは会堂で教え始められた。それを聞いた多くの人々は驚いて言った。「この人は、こういうことをどこから得たのだろう。この人に与えられた知恵や、その手で行われるこのような力あるわざは、いったい何なのだろう。」

福音書には、「驚いて」という言葉が多いです。それは、今までに聞いたことも、見たこともなかった、思い浮かびもしなかったことが、突如として自分の前に現れるからです。私たちが主の働きに触れると、そういった「驚く」という反応があります。

けれども、ここで彼らは不信仰によって応答しています。「この人」と訳されていますが、「どこから、こいつに、こういうことが」という意味合いになっています。「なんで、こういうことが起こるのか？どこから、こいつは、こう言う知恵を得たのか？あの力は、どこから出ているのか？」ということです。知恵があることはわかる。またガリラヤで、数多くの驚くべき業が行なわれていることも聞いている。けれども、どこから出ているのだろうか？と言っているのです。ここで、「これは神のなされる業だ」と神をあがめればよいのですが、一つの大きなつまずきの石につまずいてしまいました。

2B 手に職と家族 3

3 この人は大工ではないか。マリアの子で、ヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンの兄ではないか。その妹たちも、ここで私たちと一緒にいるではないか。」こうして彼らはイエスにつまずいた。

イエス様について、私たちは一方的なイメージを抱きがちです。とてもハンサムで、ちょっとスマートな体格の方であるとか？それに、とても知恵があるので、学問的な方であるとか。けれども、イエス様は、体を動かして仕事をしておられる方でした。大工です。興味深いことに、イエス様が大工であったことを伺わせる表現がありますね。「ルカ 9:62 鋤に手をかけてからうしろを見る者はだれも、神の国にふさわしくありません。」「マタ 11:29 わたしは心が柔和でへりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすれば、たましいに安らぎを得ます。」鋤も、頸木も、どちらも大工が作るものです。大工は何も家を建てるためだけではありません。むしろイスラエルの家屋は、石を使うのが普通なので、石削り、つまり石工の側面もあったことでしょう。その他、工具を使うこともあります。ですから、そういった肉体労働をする大工でした。しかし、

その知恵は、エルサレムで律法の教えを徹底的に学んだ律法学者のそれよりも、さらに上回っていました。

そして、ここで「**マリアの子**」と呼んでいます。以前、初めにナザレでイエス様が教えられた時は、「**ヨセフの子**」と呼ばれていました。しかし、ここでは「**マリアの子**」です。なぜ、マリアの子と呼んだのか？一つは、ヨセフは既に死んだとも考えられます。けれども、その時でも父の名で呼ぶものですが、マリアが許嫁の時に身ごもっていたことが、噂として流れていたのではないかと考えられるのです。ユダヤ人たちのやり取りで、イエス様は彼らに、「**私たちは淫らな行いによって生まれた者ではありません。(ヨハ 8:41)**」と呼ばれています。イエス様が、不貞の関係で生まれてきたという噂です。それを、おそらくはここで言い出しているのです。

そして、イエス様の兄弟姉妹たちですが、ヤコブがよく知られている人です。彼は、使徒の働きで15章、初代教会の指導者となっています。パウロは、コリント第一15章で、復活のイエスにヤコブが出会ったことも書いています(7節)。そしてヤコブは、ヤコブの手紙を書いた著者です。そして、ユダはおそらく、ユダの手紙を書いた著者であります。彼らはみな弟になりますが、ヨセフとマリアとの間で生まれた子たちです。さらに、妹たちもいたということで、合計6名以上、イエス様ご自身を合わせると7名以上の子供たちとなります。

そして、「**つまずいた**」という言葉がありますね。これは、「**スカンダリーゾ**」と言って、英語のスキヤンダルの語源になっているところです。非常に驚いて、ショックを受けることです。彼らがイエス様を、大工、マリアの子、そして兄弟姉妹を知っているということで、それらが、イエス様に神がおられるということを知ることを妨げることになったということです。

3A 郷里で敬われない預言者 4

そして、「**4 イエスは彼らに言われた。「預言者が敬われないのは、自分の郷里、親族、家族の間だけです。」**」とあります。ここについて、よく考えてみたいと思います。預言者とは、どのような存在でしょうか？私たちの知っている預言者は、モーセのような人もいるし、イザヤのような預言に専念した人もいます。そこに共通しているのは、「**その人を通して、神が働かれている**」ということです。その人が語るのは、神からのものであり、その人が行うのは、その人が本当は行っているのではなく、神がその人を通して行うものです。ですから、預言者を見る時は、その人間を見るのではなく、その人間の向こうにおられる神を見るのです。

1B 近い者だからこそその拒絶

しかし、なぜ彼らは神をイエス様に見ることができず、単なる人としか見ることが出来なかったのでしょうか？それは、「**自分の郷里、親族、家族の間**」ということですね。近い人だから、かえってその人となりを見ることになり、神が見えなくなってしまうのです。私たちが、自分の目に10円玉を

近づけたら、太陽さえも隠すことができますね。その近い人に、どんなに神が働かれようが、その近さのゆえにその人だけを見るようになるのです。

私たちが証しているのは、誰でしょうか？キリストです。私たちではありません。ところが、近くにいる人々は、そのキリストを見つめるのではなく、しばしば、人を見るのです。主が働かれる時は、恵みによって働かれます。つまり、その器は土の器にしかすぎません。けれども、その中に神の宝が隠されています。パウロが、土の器に例えましたが、コリント人への手紙第二に書いてあります。彼も同じく、彼の人柄、話し方、手紙の書き方、そして彼が初めの十二弟子ではなかったこと、そういった彼の人間の部分でコリントの人たちが判断して、批判しました。そして、土の器をなんとか直せと迫るのです。けれども、土の器と言っているのは、土の器だからそう言っているのです。金属にも、貴金属にもなり得ないのです。むしろ、土の器のように見た目が良くないようにされているからこそ、そこにキリストが確かにおられることを認めることができるのです。

聖書には近いからこそ、迫害したり、虐めたりした人たちがいました。カインは、アベルのいけにえを神が受け入れたのを見て、それで神の恵みを見るのではなく、弟だけがなぜ？と弟に注目したため、妬み、そして殺してしまいました。イシュマエルについても、そうでしょう。イサクが生まれたのですが、彼が神からの約束であることを認めるのではなく、その幼子の姿を見て虐めました。

2B 肉の誇り

このように、近い人たちのところには肉が働きます。自分の肉の誇りがあり、それで他の人たちが主に用いられていることが見えなくなってしまうのです。ですから、そうした肉の誇りのところに、主は時に、剣のように分裂をもたらすのです。「10:34-35 わたしが来たのは地上に平和をもたらすためだ、と思っははいけません。わたしは、平和ではなく剣をもたらすために来ました。わたしは、人をその父に、娘をその母に、嫁をその姑に逆らわせるために来たのです。」この肉のつながりは、別に家族や親族だけに限らず、自分に肉の誇りを持っていて、それで主のものとしてされている人たちに接しようとする時にも、剣となるのです。ちょうど、肉と肉の癒着が起こらないように、御霊による手術、癒着の剥離を主が行なわれるのです。

ところで、彼らは、自分たちはイエスの事を知っているのに、と自負していました。30 歳頃になるまで、いつも一緒にいたイエスですから。けれども、知っているつもりが、実は何も知らなかったことに気づくはずで。多くの人、自分は知っていると思っています。そこに肉の誇りがあり、それで見えるものが見えなくさせられています。実は、自分は知性があり、知っていると思っいても、見ているものの半分ぐらいしか見ていないことは、多々あるのです。

4A 行われぬ業 5-6

1B 僅かな奇蹟 5

5 それで、何人かの病人に手を置いて癒やされたほかは、そこでは、何も力あるわざを行うことができなかった。

ここでとても興味深いことが、「何も力あるわざを行うことができなかった」と、できなかった、とあることです。全能の力を持っているはずのイエス様が、なぜ、できなかったということなのでしょう？ イエス様は、いろいろな人を癒された時に、「あなたの信仰が、あなたを救った」と言われました。神は、私たちをご自分のかたちに造られました。だから、神は私たち人間に、自由意志を与えておられます。私たちが神のわざを、神のわざだとして受け入れなければ、その意志に反してまで、神はご自分のわざをその人に行うことはできません。私たちが、どれだけ神に心を開いているかによって、神がご自分の愛をその人に注ぐことができるかが決まるのです。

2B 近くの村々への宣教 6

6 イエスは彼らの不信仰に驚かれた。それからイエスは、近くの村々を巡って教えられた。

福音書には、驚いたという言葉がありますが、それは、人々がイエス様の業に驚いているということですが、ここではその逆です、イエス様が驚かれています。そして福音書には、イエス様が驚かされているのは二箇所あって、一つは百人隊長の信仰をご覧になった時です。そしてもう一つは、ここです。彼らの不信仰に驚かれています。百人隊長は、私の家に来ないで、おことばだけをくださいと言った人です。それでもべが癒されると言いました。そこまで、主の命令のことばに信仰をもっていたので、遠くにいても、その通りに行くことができました。ここでは、信仰というものが、人々の間になかったので、それで力あるわざが、わずかにしか行われませんでした。

ゆく年、来る年、私たちは、人々の背後に働いておられる神を見るでしょうか、それとも人を見るでしょうか？ 人の向こうには、神がおられて、着実に働いておられるのです。それを信じて受け入れる時に、主の確かな働きを知ることができます。人を見るならば、つまずいて、主の働きは見ることはできません。

ここに、「イエスは、近くの村々を巡って教えられた。」とあります。ナザレの近くの村々です。ナザレ自体は、イエス様の働きを見失いました。主は、人々が受け入れるところに留まられ、働きを拒む人々のところからは、離れざるを得ません。来る年には、主は何かを行われます。